特集　奈良ですけど。

PART.Ⅱ

小さい奈良、見つけた。

13

日常生活圏の中で「奈良独特の文化」を見つけ出そうとしたのが、舘柚日（1年生）である。「ならまち」に「ぶらさがっ」た「赤いまりのようなもの」。大学内の「掲示板」に「貼ってあっ」た『采女祭』と書かれたポスター」。通学路で見かけた『村田珠光』の文字が刻まれている小さな石碑」の建つお寺。「東向き商店街」から垣間見た「和風の建物」の「キリスト教会」。東大寺「二月堂付近の小川」で見つけた「三匹ほど」の蛍。この「大仏蛍」の存在から、「奈良公園などでは鳥獣類、魚類、指定された昆虫類などの捕獲・殺傷」が条例で禁止されていることを知る。和風のキリスト教会は「日本聖公会奈良基督教会」の建物で、景観に配慮して「郡山藩の棟梁出身の宮大工」が設計施工したと知る。通学路の石碑の人物は「千利休」に先駆する「わび茶の開祖」で、寺の「称名寺」には「獨盧庵（通称・珠光庵）という」彼の「茶室」があると知る。「采女祭」は「猿沢池の西北角」にある「采女神社の例祭」で、猿沢池に入水した「采女の霊」を慰める祭りと知るが、さらにこの神社が「池をみるに忍びない」と「一夜のうちに本殿が池に背を向けた」との伝承に心を動かされる。「ならまち」の「赤いまり」は「身代わり猿」で、「悪病や災難を持ってくるという『三尸の虫』除けのお守りと知った。これらは、どれも「小さいもの」だ。しかし、地域にとっては「国宝級」の大きな物語よりも、もっと大事な小さな物語もあるのだ。

14

川村菜月（1年生）は、「奈良に住む庶民の伝統的なもの」に心惹かれた。川村は奈良の「神への祈り」は、奈良の地勢の特性、例えば「近世以前は安定した水の供給が望めなかったこと」、また「ほかの地域との限られた接触」などと切り離せないと考える。「奈良町の家々の軒先で赤い丸いぬいぐるみがぶら下げられている」が、この「庚申さん」には地勢的な特徴と庶民の信仰の厚さを感じた。奈良の鹿が大切にされてきたのも「神鹿」であったからだ。しかし、明治に入ると、「迷信を解くということを理由」のもとで「受難の時代」もあった。時代や環境の変化によって「古い伝統」や「迷信」も「薄れてい」く一方で、「形だけの儀式や習慣が内容を伴わずに行われている現状」をも懸念する。また「現在行われていることに対する資料や文献は多いものの、その起源までを扱うものはかなり少な」いとの指摘は鋭い。

15

南野優斗（1年生）は、「奈良は住宅地の中に」も「名所が多く存在する」と気付いた。駅から大学への通学路に「高天市恵毘須神社」・「正一位太田大明神」。大学近辺に「興福院」・「大仏鐵道記念公園」・「佐保川」がある。これら「閑静な住宅街に存在する名所をアピールすべき」だろうか。ひとくくりの答えはない。通学路にある神社はどちらも民家に密接している。「観光客の増加が近隣住民に悪影響をもたらさないか」を慎重に考えなければならない。一方、大学近辺のものはすでに「注目されている」か「アピールされて」いる。周辺住民に配慮しつつ、アピールをすすめた方が良いだろう。なお「船橋商店街」を「佐保川に向かう道のり」として位置づけできれば、「周辺地域の活性化」にもつながるかもしれない。

吉澤舞（1年生）は、これまで「気に留めず側を通り過ぎ」たものが、ふと気になった。「普段気に留めていな」い「寺社」にも当然ながら「歴史はあ」り、「信仰している人々はいる」はずだ。だから残ってきたのだろう。なぜ自分は「見落として」しまったのか。「春日大社末社南市恵毘須神社」は「住宅街にひっそり佇」んでいる。「人通りが少なく、時折犬の散歩する人が通る」だけだ。いつもなら「気に留め」ることのない「さびれた神社」だ。だが、神社前看板の由緒を読んで驚いた。「初戎の時には行列ができ、警備員が配置されるほど人が集ま」り、当日頒布される「吉兆笹は毎年数千本用意されている」という。率川の「川の中におり、石造りの船に乗っ」た「率川地蔵尊」も、観光に来た「人々は気づかず通り過ぎてしまう」が、夏には「周辺で地域の人々による燈篭流しが行われ、大勢の人が集まる」らしい。「大宮地蔵堂」では「地域の子ども」が「手をあわせて」いた。「地蔵祭り」も行われている。気に留める・留めないは、その価値を体験できる機会と場が、どれだけ外に開かれているかに関わっている。「見落とし」は、それそのものの価値が低いから―あるいは価値が低いとの認識から―起きるのではない。それぞれの人と対象物との「距離感」の問題なのである。

17

淺田千尋（1年生）の抱いた疑問はユニークだ。「奈良＝鹿のイメージが広がる中、奈良では他の動物の繋がりは無いのか」というものだった。調べて驚いた。「無い」どころか〝わんさか〟見つかった。「東西南北の四方」を守る「四神」も「青龍」・「白虎」・「朱雀」・「玄武」と動物（霊獣）だった。神社の「手水鉢の吐水口」には「龍」がいる。また各神社の「神使」の動物は、稲荷神社の「狐」が有名だが、実に「47種類」もいる。「水場にいたり、十二支に関係があったりなど」するが、神社ごとに「固定されて」各々異なることが多いのだ。春日大社には「鹿」だけでなく「狛犬」もいる。「大神神社」の「蛇」はよく知られているが「一の鳥居」の前に「兎」がいる。これら「神使」の動物は「神の意向を伝える仲介者（メッセンジャー）」の役割を果たしているのだが、かつては神と人とが交感するときの媒介者（インターフェース）でもあった。「人々は自分たちの願いを神様に直接お願いするのは恐れ多い」と「神使」通して拝んだのである。さらには、「神使」の動物が「神そのもの」とされる場合もあった。人々の信仰は「動物という自然と共存し」ていた。動物は「神様と人間を繋」ぐ、特別な存在であったのだ。

18

太河原実桜（1年生）は、「奈良の文化」を「優しい」と感じた。「社会的弱者、社会的少数者」を「決してはずれ者にしない」ような「優しさ」がある、と。その「優しさのルーツ」を「地蔵」・「聖武天皇」・「大仏」から探ってみた。「地蔵」は「庶民の暮らしの身近なところで人々を支」え、人々はそのような「お地蔵さん」に大切に祀り「路傍の石仏に手をあわせ」る。「地域の片隅に宿る何かを大事に」する気持ちが循環している。「聖武天皇」が「大仏」を建立したのは「すべての動物すべての植物が幸せになる世の中」にするためだった。その「大仏」は「一本の草や一握りの土」といった「小さなものを無数に集め」て作られて、右の手を「施無畏印」に結んで「心配しなくていい」と衆生を励まし続ける。奈良は「小さなものを大切にする、小さな力を見過ごさない」文化が根付いている。そして、その「優しさ」は仏と人のあいだを「循環」し、「お互いに与え合い、受け取りあ」っているのである。